

TENOHASI

てのはし

地球と隣のはっぴい空間・池袋

会報誌第34号 2016年8月30日発行



8月17日 SWOC／ゆうりんクリニックの診察風景（p 3 参照）

2016年総会号

TENOHASIの理念	1	マッサージ班	11
会計報告	2	ほっと友の会	12
SWOC／ゆうりんクリニック始動	3	新人ボランティアさんお茶会	13
完全個室型シェルター始動!!	4	夜回り	14
総会報告		ハウジングファースト	
炊き出し	5	東京プロジェクト	15
医療相談	8	「昭和女一代記」	17
生活応援班	9	新刊案内	21
鍼灸班	10	寄付御礼	22

TENOHASIの理念

2004年春

1. サポート

TENOHASI=地球と隣のはっぴい空間池袋は、「ホームレス」を含めた生活に困った方が、孤立せずに信頼関係を生きていけることのサポートを使命とします。

「ホームレス」とは、その方がその時にホームレス状態にあるという意味で使います。ただし、「ホームレス」状態に至るまで、また「ホームレス」状態での社会の関係性の維持を大切にします。

1, サポートの仕方

緊急一時支援の他、関係性を大事に当事者とよく話し合い互いの理解の上で状況や希望に応じた、私たちができる必要なサポートを丁寧に行います。

1, 安心の空間

社会的地位、経済状況、年齢、性別、健康状態などの条件に関わらず、人々が地域で安心して生活できる空間作りを目指します。

1, つながる

置かれた立場や状況、境遇など様々なちがいを当たり前のこととしてつながることを目指します。そのために現状を共有するための情報発信をしていきます。

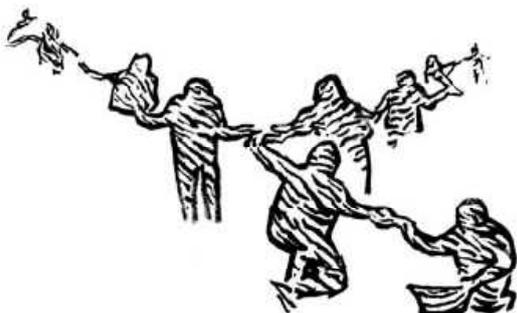
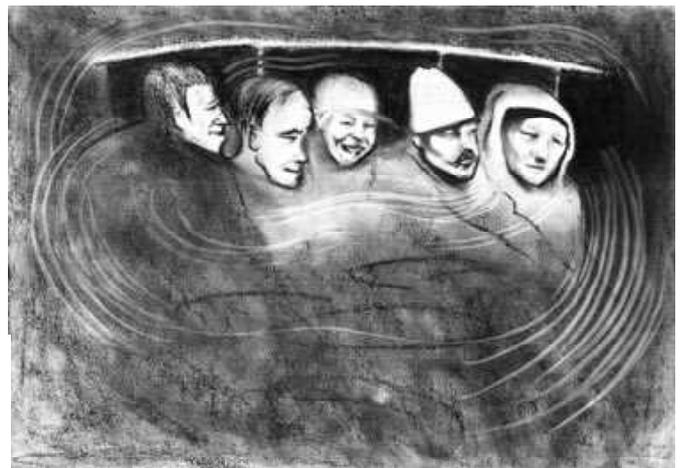
1, 大切にしたいこと

ゆっくりなこと、非効率で無駄だと思えることを大切にします。

素朴なこと、個人の個性や特殊性ということを大切にします。

1, 池袋・地域

池袋という地域性を把握した上で、地域に根付いた、時と場に合った活動をこころがけます。



by GEOFF READ

皆さまのおかげで活動を継続できます。会計報告

みなさま、いつもご支援ありがとうございます。

2015年度、物資は食糧・衣料共に順調に集まりました。ありがとうございます。

財政面では、収入が皆さまからの寄付金が約900万円、庭野平和財団からの助成金が300万円の計1200万円でした。1年前の会報誌では、

2015年度予算
収入…766万円
*個人からの寄付466万円
*庭野平和財団助成金300万円
支出…968万円
差引…マイナス202万円

みなさまにお願いして寄付金を466万円は集めて、今年度新たに庭野平和財団からの助成金300万円を頂くことができたので、赤字額はさらに減るという予算を立てました。

と書きましたが、途中までは

寄付金の集まりが低調で、赤字になるのではないかと心配しました。

しかし、年度末に匿名の方から「末期ガンのため、蓄えていたお金を寄付します」との添え書きつきで、500万円という驚愕の大口寄付を頂き、赤字を免れました。

支出は、シェルターの家賃を連携団体が補助金でまかなってくれたので、予算より減らして約875万円でした。

今年度の予算は左の通りです。

2016年度予算、
収入…820万円
*個人からの寄付520万円
*庭野平和財団助成金300万円
支出…1010万円
*新設した個室シェルターの経費・ゆりりんクリニック設立負担金など
差引…マイナス190万円

皆さまのご支援が頼りです。今年もよろしく願います。

特定非営利活動法人 TENOHASI 2015 年度会計報告

(円)

前期繰越		9,451,145
収入	寄付金	9,044,433
	庭野平和財団助成金	3,000,000
合計		12,044,433
支出	炊き出し	1,131,915
	生活支援	2,212,067
	シェルター光熱水通信費	251,198
	生活応援スタッフ謝金	4,468,257
	事務費	685,438
合計		8,748,875
単年度		3,295,558
次期繰越		12,746,703



昨年との比較はホームページをご覧ください。

SWOC / ゆうりんクリニック 始動しました。

前回の会報誌でお知らせしたとおり、4月に、待望の「自前の医療／支援機関」である「ソーシャルワーカーズオフィス／ゆうりんクリニック」が始動しました。

果たしてどんな効果があったのか、ソーシャルワーカーでCEOの戸口真良さんと、精神科の森川すいめい医師に聞きました。

「たくさんの患者さんがいらしています。内科も精神科も。てのほしを通じて路上を脱出した方が多いです。炊き出しの医療相談からクリニックに直行する人も居ました」

「ゆうりんでの精神科医の仕事？ ソーシャルワーカーにつながることで。あと、書類を書くことくらいです(笑)。」

「精神科の診察室は、大きなテーブルがあるだけなんです(表紙の写真参照)。そこで、患者さんと医師とソーシャルワーカーが対等な立場でとことん話をします。『初めてちゃんと話を聞いてもらった』

って言ってくれた人もいました。」「話し込んでから、一人にかかる時間がすごい。まったく儲からないクリニック(笑)」

「それで皆さんしゃべくり倒して、

受診が終わってもしゃべりたい人は別室で事務をしているワーカーやスタッフに話の続きをするんです。スタッフは仕事があるから大して話に乗れないけど、受診日でもないのに勝手に来ている他の患者さんが話にのってきて、意気投合しちゃう。そんなこんなで、勝手に元気になっちゃう人がでています(笑)」

「それまでの人生で何を言ってもダメ出しばかりされていた人が、ここでは話を聞いてくれるから、すごく熱く語ってくれて。

そうなると思っても夜でも構わず話しに来たり電話くれたりしたんです。不安なんです。夜中の3時に電話がかかってきて3時間話し込んだりとかしゅっちゅうでした。

でも、どこかで憑き物が落ちたみたいに落ち着いちゃったんです。

私たちに飽きたんですね、きっと。安心したって言うか。それまでは延々と話さないと落ち着けなかったのに、最近は連絡事項だけラインで来ます(笑)。

それでさっさと次のステージ(デイケアや作業所など)に行っちゃうんです(笑)」

「薬物依存から脱しよう頑張ってきた方が、あることをきっかけにパニックになって『昔の親分に連絡してクスリをもらおう』ことにした。もう止めないでくれ』って連絡をくれたんです。必死に止めて、考え直してもらえそうになったんですけれど、最後は『これで行かなかったら親分に迷惑がかかる』っておっしゃって、出て行かれました。でも、その次の日にその方がゆうりんにいらして『クスリはもらわなかった』と言ってくれて……」

「あれだけ頑張ったんだろう、どれだけきつかったんだろうと思っ

て涙が出ました。」

「生活保護を申請してから開始決定がでるまでだいたい二週間か

ります。その間はふつう病院にかかることは認められない(生活保護が認められなかったら医療費の出所がなくなる)ので、特に内科の症状を悪化させる人が居たんです。でも、ゆうりんクリニックが『保護が認められなかったら取りっぱぐれてもいいから診ます』と言ったので、保護開始前でも医療につながる事ができるようになりました」

「重篤な症状で大きな病院に救急搬送した場合でも、クリニックの名刺を出して『退院したらこちらで診ます』と伝えると、後でちゃんと報告してもらえて、その後の診察がスムーズに行くようになりました。」

クリニックはまだまだ赤字ですが。クリニックのためのカンパも募集中！

完全個室型シエルター・「ちはやハウス」「しいなハウス」始動！

①「ときわハウス」報告

2016年3月末までの約1年半、てのはしは定員5人の個室型シエルター「ときわハウス」を運営をしました。

30人を超える利用者さんのうち、半数近くが地域でのアパート生活へと移行されました。

つくろい東京ファンドが運営する中野のつくろいハウスを利用された方についても同様の結果が出ています。

このような個室シエルターの重要性は内外で広く認められるようになりました。

でも、何にもまして嬉しいのは、こうして出会った利用者さんの多くが現在では、マカロニやあさやけペーカリーの主軸メンバーとなり、また、夜回りや炊き出し公園でもてのはしの頼もしい仲間として、元気な笑顔を見せてくださる事です。

②完全個室型シエルターへ

「ときわハウス」は設置者である「ホームレス資料センター」の決定で今年3月末で閉鎖されました。

そのため私たちは後継のシエルターを設立することになりました。

どんなシエルターにするか？ スタッフとの話し合いで、今回は「完全個室型」にすることにしました。

「個室型」と「完全個室型」の違いは、「個室型」が寝るのは個室でリビング・キッチンが共同の「シェアハウス」タイプだったのに対して、「完全個室型」は、要するに「普通のアパート」だと言うことです。

しかしアパートを借りるには敷金礼金など多額の初期費用がかかるうえに、不動産契約に関わる様々な手続きが必要です。

そのサポートを申し出てくれたのが、「つくろい東京ファン

ド」（代表は「自立生活サポートセンターもやい」の稲葉剛さん）です。「住まいは人権」を掲げる「つくろい」は、この冬、新たにハウジングファースト

東京プロジェクトに参加してくださいました。

新シエルターは「つくろい」が一括して法人契約していただき、利用者の支援はてのほしが行うという体制で運営します。

さつそくこの春に「ちはやハウス」（2部屋）、そして6月にはアパートを一棟借りした「しいなハウス」（4部屋）が設立され、すでに満杯になりました。

ここを拠点として、東京の文脈に即した私たち流のハウジングファーストを展開できるかどうか、これを成功させて路上生活者支援のスタンダードを行政に提示できるかどうか、そして一人でも多くの方が安心して暮らせる町づくりをできるかどうか、それが

私たちの課題であり目標です。

しいなハウスの一室



特定非営利活動法人TENOHASI



2016年総会報告

2016.6.4

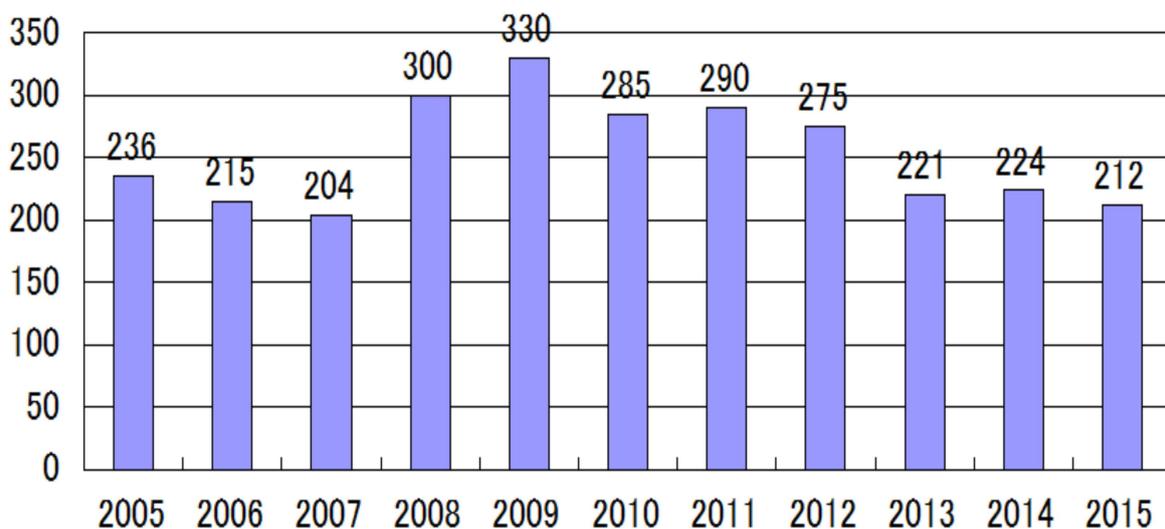


炊き出しに並んだ人数の2015年度平均は、前年より約12人減の212人でした。

2013年にリーマンショック前の水準に落ち着きましたが、2014、15年はほぼ横ばいで、劇的な減少がないのが悩みの種です。

*厚労省の「ホームレス概数調査」では東京都の「ホームレス」はこの3年間で約25%減少したことになりますが、てのぼしの炊き出しに並んだ人数の減少率は約5%に止まっています。

炊き出しに並んだ人数の推移2015



総会報告

各セクションから

炊き出し「調理班」

★活動内容

毎月第2・第4土曜日、午前11時に文京区の駒込大観音光源寺に集合し、お庭等をお借りして調理を行なっています。約500食分のご飯と野菜たっぷり汁を作ります。



★大きな変化

これまでご住職の庭をお借りしてのアウトドア作業でしたが、今年3月から敷地内の空き家で作業させていただくことになりました(洗い物は従来通り)。二階建ての一階部分で調理作業、

二階は荷物置き、休憩スペースとなりまりました。移行期間が大変でした。

たが、今は道具等の置き場も決まり、スムーズに行なっています。

これで、雨や雪の日の作業やりやすくなるでしょう。



★あたらしい試み

ボランティアの参加が多く、余裕があるときには、ミニ学習会を行なうことに。初心者向けに、「ホームレス」と出会う子ど

もたち』のDVDを観てもらいました。その中のおひとりの感想です。

「自分が今まで持っていたホームレスの人々に対する印象が変わった。今まで偏見が自分にあったが、そうでは無いのだと思いい、むしろ前向きで明るく生きておられると感じた。」

★ボランティア

この一年、十分な人数は集まっています。学生、社会人、リタイア世代など、老若男女さまざまです。近くにお住まいで自転車で来る方もいれば、群馬県からの参加者も。越年越冬活動中は、小学生・中学生の参加もありました。

雨降りなど天気の悪い時は、ボランティアが少ないのが悩みです。調理場でお弁当にまですなければならぬので、人手がいつも以上に必要なのです。1月2週も、時間ギリギリになって冷や汗でした。

長年、味を見てくれていた太田さんが事実上引退となり、高校生軍団も進学などで毎回出られなくなりましたことから、「だれでも、どのセクションでもできるようにしよう」ということ

に。洗い場、米とぎ、野菜切り、煮炊きと、徐々になじみのメンバーが、それぞれの仕事を理解し、中堅スタッフが育ちつつあるかなあというところです。

★味付けと工夫

毎回、野菜の種類によって味付けを変えています。例えば、玉ねぎが多い時は甘みが強くなるのでみりんはひかえめに：なごです。また、鶏肉の皮など、並ばれる方が噛み切れない(歯が弱い方が多い)ものはなるべく小さく、食べやすく、を心がけています。

★大塚モスク

2015年度も大塚モスクさんから、おいしいカレーや炊き込みご飯の提供がありました。調理班としては白飯と野菜の浅漬けを用意するだけなので、とても助かっています。

★求ム！

トラック運転ボラ！
調理場から公園まで、ご飯と野菜汁等を運ぶトラック運転手が足りません。今後の課題です。
(高石洋子)

炊き出し「公園班」

毎月第2・第4土曜日、東池袋中央公園にて、16時20分から、活動を行なっています。初めての方、もう顔なじみの方、老若男女大勢の方々にお会い出来ることは毎回とても嬉しいことです。



〈ボランティア数〉

調理・公園・医療相談など土曜日の活動のボランティアは、1回当たり平均75名で昨年とほぼ同じでした。そのうち初めての方は1回当たり平均18名、年間では349人に上りました。

〈初めて参加される方に〉

初めての方には専用の受付記入フォームにご記入頂き、ボランティアとわかるよう、首から下げるカードをお渡ししています。カードと紐の色は、通常の白ではなく、目立つ黄色いもの

を使用しています。

配食では、以前に「看板持ちを任されたため、配食の現場を実際に見ることが出来なかった」という声がありました。看板持ちは注意事項を示して近隣とのトラブルを避けるためにも重要なのですが、ご飯を配る現場から離れた位置になってしまいうため、初めての方には、極力ご飯やお汁をよそう作業を行なっていたり心掛けています。

〈参加理由〉

一時期、「学校の課題で検索しホームページを見て来ました」という方が大勢いらっしゃいました。今もそのような方々はおられますが、そればかりではなく、理事の森川さんの著書を読んで、テレビで放映されていた越年越冬活動の様子を見て、東京プロジェクトで連携している稲葉剛さんの講義を受けて、友人から聞いて：など、きっかけの幅が広まっているようです。

〈リピート参加〉

折を見て2回目、3回目と、参加して下さる方へ“なぜ活動に参加して下さるのか？”質問しております、「1回だけで

はわからないと感じたことがあったから：」というご回答をいただくことが多いです。

また、昨年度は参加が初めて2・3回目の方を対象に、炊き出し後に「ボランティア茶話会」を開催しました。これをきっかけにリピーターとして参加されるケースが増えています。

〈公園ツアー〉

主に初めて参加された方を対象に、公園内の各活動をご案内する「公園ツアー」を行なっています。その際には、ただその光景を見て頂くだけではなく、ホームレス状態の方の推移や理由をはじめとして、なるべく多くをお伝えするように努めています。また、参加された方からのご質問も、大切にお答えしております。今まであったご質問には「路上の方が救急搬送された場合、搬送先の病院の受診料金は、誰が払うのですか？」「生活相談を受ける仕事をするには、資格が必要なのですか？」といったものがありました。

〈寄付品受け取り〉

時折、抱えきれないほどの衣

類だったり、防寒具であったり、石鹸や髭剃り歯ブラシ類、であったりを寄付として公園にお持ちいただくことがあります。

団体としてもお礼を申し上げたいので、お名前やご連絡先を尋ねますが、遠慮して立ち去ってしまう方も多く、どのように感謝をお伝えすれば良いか、いつも考えています。

〈メール問い合わせ〉

事務局メールに届いた炊き出しへの問い合わせは約200通でした。

大半はウェブサイトに場所を載せていない調理班や片付け班への申し込みになりますが、参加班の通知のない方に確認すると公園班との回答が多いです。また団体参加の多くも公園班になります。

〈今後について〉

受付の内容を色々な方に共有し、一個人に依存せず、その場にいる人の誰かは対応ができる体制を目指しています。また、ボランティア受付用紙やアンケート用紙の質問事項も修正を考えています。

(吉野朱実・小野田北斗)

医療相談

炊き出しのとき、公園にブースを出して（写真参照）、希望者の相談に乗って、炊き出しにいらした皆さんの健康向上に努めています。

水曜日の夜回りにも医師が同行して、健康について相談しています。

★ボランティア医師

「カトリック医師会」の方が第2土曜日、また世界の医療団から内科の西岡さん、精神科医の森川さん、富岡さん、斎藤さん、中田さんと、最近から順天堂大学の武田さんが参加し相談のついでにいます。また看護師の高桑さんと運搬・薬出しのボランティアの皆さんに支えられています。

★相談件数

1回平均38人。かなりの方はリピーターで、毎回血圧を測るなどして健康管理に努めている方や、風邪薬・マスク・胃薬・カイロなどをもらいに来る方など様々です。

身体的・精神的に病院にかか

る必要があると判断されて紹介状をもらった方は23名でした。

★最近の状況

最近はいくらも在庫切れになつてきた「血圧・おくすりカード」を新たに作りなおし相談にいらした記録を付けるカードをお渡しすることや、列に並んだ方との良いコミュニケーションの方法を模索するなど、相談会の在り方の工夫を話し合い考えています。

厳冬期は保温のため、テントを張り、ストーブをつけるのですが、医療相談従事者から、炊き出しの他のスタッフの方は屋外にいるのに申し訳ないという声がありました。しかし、その暖かい場の有り無しで、相談に立ち寄る人数が違い、相談もゆつくり聞けたり、重ね着の上着を脱いでの血圧測定、患部を診るために服をまくり上げたりすることにも敷居が低くなるため、相談に来られる人のために必要という結論に至りました。

今年初めころから医療者やサポーターの参加が減ってきてピンチだったのですが、その契機を生かして新たな方たちに積極的に参加してもらえてきていて

助かっています。

西岡医師が循環器の専門であることから、路上生活を長く続けてこられたかたの心臓への負担が大きいことが明るみに出てきています。

今後、炊き出しの場で健康に関するチラシの配布やイベント的に血糖値の測定などをできればと話し合っています。そのよいうなことをきっかけに、無理強いするわけではなく、自分の健康をちよつとも考えるきっかけになれば、と考えています。

（中村あずさ）



生活応援班

皆さんが生活応援班の姿を目にするのは、毎水曜日に行われる夜回りのときと、炊き出しでの生活・福祉相談のときではないでしょうか。

でも、私たちの仕事は相談を終えてからが本番です。路上脱出を希望される方に、まずその晩の宿と食事の手配をしなくてはなりません。シェルター、カフェ、漫画喫茶、ビジネスホテル、カプセルホテルにドヤ。それに缶詰やインスタント食品



を大急ぎでかき集めます。健康状態が不良となれば、医師に相談したり、救急車に同乗して、ERから入院手続きまでのお手伝いも。

翌朝には、生活保護制度や路上生活者自立支援事業をはじめとする、福祉サービス利用申請手続きをするために行政機関への同行支援を行います。生活保護申請には数時間かかることも稀ではありません。利用者さんが望まれる宿所で、医療等の適切なサービスを受けて生活再建ができるよう、皆でじっくりと話し合います。

生活保護開始後も支援は続きます。利用者さんの中には路上暮らしの間に身分証明書等を紛失されてしまった方も少なくありません。住民票がどこにあるか調べて、転出・転入手続きを済ませ、銀行口座を「復活」させたり、新たに開設したり。年金事務所、ハローワーク、携帯電話ショップ、病院、補聴器専門店、理髪店、必要と依頼があれば、どこへでもお伴します。

生活保護開始から数か月が過

ぎて、アパート転宅OKとなれば、不動産屋さん回りが始まります。意外かもしれないですが、生活保護利用者と契約してくれる家主さんは多くありません。「(賃貸)保証会社」なるものの審査を通る必要もあつたりします。高齢者となると困難は倍増します。こうした点をクリアできそうで、かつ、信頼できる不動産屋を見つけるのはなかなか骨の折れる仕事です。

運良く物件が見つかったら、内見に同行し、契約へ向けてのお手伝い、そして、リサイクルショップなどで家財道具を揃えます。そうそう、車を運転して、引越しもお手伝いしますよ。

アパート転宅後は、安心して地域生活を送ることができるよう、定期訪問や相談支援、受診同行、居場所作りとその運営のお手伝い、数は多くないですが、就労支援も必要に応じて行っています。

もう一つ重要なのは、知的・精神障がいを抱えて路上で生きてこられた方たちへの支援です。そうした方たちへの支援を主眼

に置くコンソーシアム「ハウジングファースト東京プロジェクト(HFTP)」の一員として、てのはし生活応援班は、利用者さんの地域生活への復帰とリカバリーを様々なかたちで応援します。精神科受診や障がい者支援センターへの同行、障がい福祉サービスを利用するための各種手続きやグループホーム、障がい者事業所へのつなぎなど、HFTPのスタッフと多職種連携しながら、利用者さんが希望する地域生活を実現、維持すべく、期限を設けることなく支援し続けます。

★大切にしていること

その際に私たちが何よりも大切にしているのは、利用者さんが安心して自己選択(「失敗」も含んで)ができるような人間関係および環境を作ること、そして、利用者さんの自己決定に耳を傾け、それを尊重することです。そのためにはスタッフ間に緊密な情報共有がなくてはなりません。私たちがしょっちゅうスマホをいじっているのはLINEで時々刻々情報交換しているからなのです(ホントです)。

(小川芳範)

鍼灸班

★活動内容

毎月第2・第4土曜の炊き出しの日、公園内にテント張って、はりとお灸を使った鍼灸治療を希望者に無料で提供しています。

★当日の動き

15時に荷物置き場となっている「東池袋四丁目はりきゅう院」に集合。道具をリヤカーに積んで出発、16時治療開始。18時半から19時頃治療終了。リヤカーで荷物を戻して、活動終了は19時半頃です。

★参加者…登録鍼灸師は8人おり、そのうち各回2〜5人が1回の治療に参加しています。受付係は1人でカルテや順番の管理、問診を行ないます。準備、片付け、運搬は参加メンバーと公園のおじさんにも協力していただいております。

★利用者…生活保護・年金受給・路上の方々と様々です。40〜70歳代の男性が多いですが、20〜30歳代や女性の利用もあります。一人につき20〜5

0分程度の治療を毎回10人前後の方が受けられています。

症状では、腰痛がダントツ一位。長年の肉体労働や不慣れた生活環境に関連すると思われる。首肩腰脚膝など身体各部の痛みも多く、その他に頭痛、坐骨神経痛、喘息、むくみ、不眠、ねんざ、耳鳴り、全身養生などの訴えで治療を受け来られ方々があります。

★効果

無料で治療しているので皆さんありがたがってくれ、本当の所どこまで効果が出ているか分かりづらいのですが、

「治療後は身体が楽になる」と通ってくださる方、「やつてもらって良くなったよ。どうもね！」と帰りがけにテントに寄って報告してくださる方、「この人もやってやってよ」とお友だちを連れて来てくださる方、不眠でいらして治療中にグーグー寝てしまう方・・・

と、信頼して来て頂いているのだなと感じています。

月に2回しか治療していないし、皆さんそれなりにお年を重ねて、しかも古い傷や長年貯め

てこられたお疲れが多いので、すぐ治るといえるのは難しいですが、少しでも皆さんの健やかな生活へのお手伝いをするべく、これからも鍼灸班一同お待ちしております。

★工夫

食事の心配をしなくて済むよう、配食時間に治療中の方の食事を取り置きしています。

待ち時間が30分〜1時間と長くなることが多いので、順番がスムーズにまわるよう番号札を使うなどして工夫しています。

★できるようにしたいこと

①それぞれの人に合った対応を。生保受給で医師の同意書があれば東池袋四丁目はりきゅう院にて無料で快適に治療が受けられます。公園とあわせて利用すれば治療の機会が増やせます。生保の方で医師の同意書がもらえない方も治療院で割引価格を提供しています。

そして、路上生活の方、症状の重い方により手厚い関わりを心がけます。医療班や生活班との連携、情報提供、養生のすすめなども提供できればと考えています。

②安定した人員確保。

鍼灸師、受付係（医療系の資格や経験などは必要ありません）、協力者を常時大募集しています！途中参加途中退所OK、協力していただける時間・内容で歓迎です。

③資金面…治療用材料は各鍼灸師の持ち出し。ベッド・テントの修理費、電池や冬のカセットガス購入費は班として必要です。鍼灸班参加者の個人的寄付でやっている状況です。

（嶋田恭子）



マツサージ班

毎月第2・第4土曜の炊き出しの日、公園内にシートを敷いて1回平均約8人に無料でマツサージをしています。ではそのメンバーから一言ずつ。

★マツサージ班の施術者の二名は視覚に障害を持っています。昔で言う座頭市と同じ按摩さんです。仕込み杖ならぬ白い杖を振り回して池袋にやって来ます。マットで待機。何処が悪いんですか？問診しながら触診です。まるで指先、手のひらに目があるようにコリ、疼痛のポイントを探ります。良くわかるね！と良く言われます。そりゃ、プロですから：自画自賛。コリ、見つけた♪コリ、痛みが取れて気持ち良く去って行く。ヨシヤ！とれないと納得いかない！取ってやる！！血が騒いで時間内に終わらないこともしばしばある。ブライドが許さない：楽になったよ！この笑顔を頂くため池袋にやって来ます。五、六名施術すると晩御飯の美味しい香りが届くと仕舞いの時刻。気を付けて帰んなよ！ 声が掛

かる。優しい人達です。心がホッコリします。又、次回も頑張ろう！来た道を杖を振り回して帰路に着く。横須賀への帰路、車内で反省会。終われば爆睡です。
(橋本善博)



★マツサージボランティアを初めてから、この6月で5年になります。月日が流れるのは早いもので、いつしか、私の体にもたつぷりと脂肪が付きました。今年、体調が悪く、余り参加出来ずにいますが、久しぶりに

顔を出すと皆さん、「おねーちゃん、待ってたよ」と、声をかけてくれます。「ああ、マツサージ師になって良かったな」と、思える瞬間です。最近では、利用者の方とも軽口を叩ける様になり、私に付いたあだ名は、「ドS先生」利用者の圧痛点を見つけると、「ここ、痛いよね」と、うれしそうに言うからだそうです。以前付けてもらった、「マツハ文朱」も捨てがたいの



で、これからは、ドSマツハ先生と名のらせて頂きます。皆さんのおしゃべりも楽しいのですが、やっぱ、「楽になったよ、ありがとう」の言葉が一番うれしいです。この言葉を聞けるからこそ、続けられるんだと思います。路上生活者やネット難民の方達のお話は、何度聞いても目から鱗です。悲観している人よりも、なっってしまったものはしょうがないさ！と、前

向き？な人が多いのに、驚きます。何だか、人間の底力を感じて、イヤな気分も悲しい気分もふっ飛ばしてくれます。マツサージでいやしてあげるつもりが、いつも、私がいやされて公園を後にします。ありがとう。
(橋本邦恵)

★第2第4土曜日、今日も10数名の個性あふれる利用者達が公園、トイレ横、マツサージコーナーにやって来ました。この人たちとの触れ合いがあるからやめられません。うつの人、肩から背中まで異常に硬い人、足が24時間しびれている人、この公園の雰囲気が入った人、無料マツサージに感激する人、ストリートファイティングの好きな若者、ギャンブル中毒、元酒乱？、自称詩人、てのはしに刺激されてボランティアを始めた人、昨日刑務所を出た傷害事件をたびたび起こすという人、過去を知りたいとは思いますが自分からは聞きません。利用者の体を楽にすること、和やかな、明るい、笑いの絶えない、良い雰囲気で快適に過ごしてもらおうこと、を目指し続けたと思います。
(加藤正毅)

ほっと友の会 (お茶会)

★活動

毎月第4土曜の炊き出しの日に、公園内にダンボールを敷いて、みんなでお茶や手作りのお茶菓子を食べた後、輪になって語り合い、聴き合う活動です。昨年度は、1回平均約12・6人が参加しました。

★感謝

昨年度(2015年)も、みなさまのご理解とご支援でほっと友の会を無事に続けることができました。誠にありがとうございます。

★昨年度の成果と課題

・ 昨年も1年間、活動を継続し、11年目を終えることができました。

・ ほっと友がほっと安心できる場であることを参加者みなさんが知ってくださって、常連さんが設営からお話し会での聴き合いまで意識してくださっています。みんなでほっと友を作っているという印象の強い1年でした。

・ 例えば、生活のことでイライラして公園に来た常連さんも、ほっと友の「お話し会」の時間にはその嫌な感じを出しません。

ある方は、「みんなが集い、また会えたな、と確かめ合う場だから。ここは大事にしたい。」とおっしゃっていました。会の前後では愚痴もこぼされますが、私たちスタッフはそれも含めて、会えて嬉しいことを聴く姿勢で示せました。

・ 新人ボランティア茶話会をきっかけに参加する方が4名いました。事前メールで大切なことをお伝えしている初参加の方同様、意識高く参加されていました。

・ 課題はスタッフの数です。参加人数の増減はありますが、スタッフが2名だけなど、少ないことがあります。人の話を共感とともに聴き、自分の考えをみんなと共有できる仲間を増やしていきたいです。

★今年度の方針

・ 今年も、ほっと友の会が参加される方の心の居場所の一つとなつて、ご自身が良いと思える人生を送られることへの応援ができればと願っています。今年

度も暖かい時間を欠かすことなく実施することが目標です。

(稲見得則)

☆おまけのこぼれ話

2016年の2月に、佐藤初女さんが天に召されました。享年94歳。青森県の岩木山の麓に1992年に「森のイスキア」を開設し、「日本のマザーテレサ」と呼ばれていた方です。生きづらさを抱え、癒やしを求めて訪れる人々を迎え入れ、丁寧につくった美味しいご飯を提

供し、一緒に食べ、相手の話を静かに聞いて、共に過す、という活動を地道に続けていました。わたしは、ほっと友の会は、路上のイスキアだと感じています。初女さんのようなカリスマはいないけれど、森のイスキアのよう、訪れた人が、こころのエネルギーを回復し、生きる力を取り戻せる場を皆で、実現し続けていきたいと願っています。

(M@育休中)



新人ボランティア さん茶話会

2015年12月

2016年5月 全15回

★発足経緯

「新人ボランティアの定着率の低さ」が、現場では長年の課題になっていました。

現場に来て感じたことを新人ボランティアさんが話して帰ることのできる場が必要だということになり、毎月1回、炊き出しの後、新人ボランティアさんとともにスタッフが喫茶店で語り合う時間をもちました。

★全15回の茶話会参加者数

参加者の顔ぶれは、延べ数で、学生41人。学生以外31人。学生以外の参加者の内訳は、仕事に就いている人が延べ28人。病気や障がい等の理由で就いていない人が延べ3人。ただ、仕事に就いている人の中にも、「路上に出ようと思ったことがある」等、語られる方もおり、それぞれご事情は違うものの、ぎりぎりの生活をされている方が、茶話会参加者の2割弱を占めていました。

★参加しての感想

・「世代を超えた話が聞けて、いろんな立場の人の話を聞けるのが楽しい」

・「学生同士では、話せないことが話せた」

・「自分の知識の足りなさを感じる。もっと知りたい。こうして話していると、自分の無力さも感じ、悩んでしまうが、考えていきたい。今度夜回りにも参加します」

・「ニュースで聞いていたことが、きょうの茶話会で身近なものに感じられた。社会的なこと、政治的なこと、幅広くつながっている。選挙の時にはよく考えて投票できるようにしたい」

・「与える側として参加するのではなく、助け合える場として参加していきたいと思った」

・「皆さんの話を聞いて、活動の意義を考えることができてよかった。また参加したい」

★成果

・茶話会に来て、活動をリピートした人は17人で参加者の約3割。そのうち長期に継続している人が5人。長期とはいえないものの継続的に参加するようになっていた人が12人。

・ただ炊き出しに来るだけでは

話せなかったことを話して帰ることのできる場になっていた。

・「本人の望みで、路上で看取った」経験を苦しみながら語られた方に「それが本当に本人の望みといえるのか。選択肢がなかっただけではないか」と、支援の視点を伝え共有できたのは、私たちにとても嬉しいことだった。

・「汚いイメージだったのに、皆すごくこぎれい。なのに、何故、ここに並ばないといけないのだろうか？」など現場に参加することで初めて出てくる疑問に答える場になっていた。

★気づいたこと

・ぎりぎりの生活をされている方は、気持ちはあるのに、継続的に活動に参加する余裕まではないというジレンマをもっておられる。

・新人ボランティアさん向けのチラシ（疲れたら休んでよいですよ等）、DVD「ホームレスと出会う子ども達」の上映会は、好評なことがわかった。

・参加するボラさんは、TEN OH ASIの活動の中で、自分のポジションができないと続かないのかな、という印象。「わたしならここ！」という場

をみつけられる人と見つけられない人がいる。

★今後の課題

・スタッフの手当てが付かなくなり、今年5月で茶話会は閉じました。時間が割けるスタッフが現れれば、是非、再開してほしいです。

★さいごに

「新人ボラさんが定着しない！」とはじめた茶話会は、多くの発見と出会いがある素敵な活動でした。茶話会スタッフも多くの刺激をもらいました。参加して下さったボランティアの皆さん、見守って下さったTEN OH ASIのスタッフの方々に感謝いたします。

ただ、2015年度の炊き出し（調理&公園）参加者数平均は75人。うち、新人は18人。これだけ見るとけっこうなりぴート率です。

結局、ここから、さらに中核の仕事を継続的に責任をもって担って下さるボランティアさんの確保が課題なのだ、という認識を皆で共有しました。

（稲見麻里）

夜回り

おにぎり作り

毎週水曜日の夜、池袋駅及びその周辺の路上生活状態のかたがたへのアウトリーチ「夜回り」が行われます。その際路上のかたに、炊き出しの案内などの情報を掲載したチラシと一緒に、おにぎりをお渡しします。そのおにぎりを毎週水曜日18時半から、マカロニさんのスペースをお借りし、毎回約120個作っています。アルファ米をお湯で戻したのを使っていますが、毎回同じおにぎりにならないよう、バリエーションが付けられるよう、予算の範囲内で、添えるもの



るものを工夫するよ
うにし
ていま
す。ま
た、御
存知
のか
たも
多い
かと思
います
が、「あ

さやけベーカリー」さんで、無添加手作りパンを40個とおにぎりを40個作って下さっています。パンの種類は毎回異なり、サツマイモパン、カボチャパン、焼きそばパン：など。毎回とても美味しいパンばかりで人気があります。

そして近頃は、手作りラスクのご寄附も頂いています。毎週60袋ものたくさんの袋入りラスクを頂けるので、それらも路上のかたがたにお配りさせて頂いています。

おにぎりを受け取られる路上のかたに、おにぎりの味などの感想を聞いて、それを反映したおにぎりを作れたら良いかと考えています。少し前にたまたま、海苔の佃煮が信じられないほど安く大量に手に入ったので、海苔の佃煮を添えた白飯おにぎりを作り、お配りできたことがあったのですが、後日、「佃煮白飯おにぎりはとても好評だった」と聞きました。今後もそんなチャンスがあるといいなと思っています。

(吉野朱実)

夜回り

● 毎週水曜日の夜、池袋駅前公園で21時半から並んだ方におにぎりとおにぎり配り、その後4コース(池袋駅いけふくろうコース、池袋駅有楽町コース、東口コース、西口コース)にわかれて駅や公園・路上で寝ている方や歩いている方を訪ねて回ります。体調の悪い方は医療班の医師に、路上脱出を希望される方は生活応援班のスタッフにつながります。

● 人数

おにぎり配布に並んだ方は年間平均で約43人で昨年度よりも約10人減少しました。

夜回りで出会った路上生活の方は年間平均91人で昨年度とほとんど同じでした。警備の強化・寝られる場所をつぶすなどの排除が進んでいます。路上で生活せざるを得ない方がまだこれほどいます。

● ボランティア

毎回20〜30人もの方が参加しています。初めての方は毎回2〜5人程度です。

各コースのリーダーはほぼ決まっています。ですが、持続可能にするにはリーダーが交代可能でなければなりません。昨年後半から、新しい方がコースと声掛けの仕方を覚えてにリーダーができるように意識的に働きかけをしています。

● 各コース別の特徴

東口コース…長年路上で生活している人も多く、新たな相談へのつながりは少ない。人数は少しずつ減少している模様。この区役所建て替え等の影響で、場所を変更される人も出ています。

西口コース…公園で寝ている人が多いのだが、夜回り後に段ボールハウスを作る人が多く、実数は多い。

いけふくろうコース…びっくりガード工事・地下街の工事です寝られる場所がどんどん狭まっています。

有楽町コース…体調不良の人が多く印象がある。他地域からの流入と見られる新顔の方が多い。

(岡室恵)



ハウジングファースト東京プロジェクト



訪問看護センターKAZOC



SWOC/ゆうりんクリニック



■「ハウジングファースト東京プロジェクト」とは■

東京プロジェクトは、「医療・福祉支援が必要な生活困難者が地域で生きていける仕組みづくり・地域づくりに参加すること」を理念とし、「池袋周辺と他の地域でホームレス状態にある人の医療・保健・福祉へのアクセスの改善、そして精神状態と生活の回復」を目的とし、TENOHASHIと世界の医療団、浦河べてるの家（東京オフィス べてぶくろ）の3団体によって、2010年4月より活動を開始しました。

ホームレス状態の方の多くが、何らかの障がいや自分では解決できない生き辛さを抱えており、安定した地域生活を営み、社会の中での適切な居場所を持つには、医療や福祉のサポートを必要であることは、これまで十分に認識されてこなかったことです。この問題に向き合い、解決するための体制と仕組みを作り、動かしていくことがプロジェクトの活動です。

プロジェクトはその後、池袋あさやけベーカリー、訪問看護ステーションKAZOC、つくろい東京ファンド、そして今年

4月からSWOC/ゆうりんクリニックと参加団体を拡大し、活動の幅と厚みを増しています。2016年より、ハウジングファーストを実践していくことを重要なテーマと位置づけ、プロジェクト名称をハウジングファースト東京プロジェクト（以降HFTPと記述）と改称しました。

■活動概要■

定期的な炊き出し、アウトリーチ活動としての夜回りを行い、ホームレス状態の方との関係性を築きながら、必要に応じた緊急な医療対応や様々な相談対応を行うことから始まり、自立した生活への移行を目指している方に対しては、シェルターの提供、住まいさがし、各種医療福祉手続きのサポートなどを行っています。体調を崩されている方や、障がいをお持ちの方に対しては、医師や看護師による医療相談対応、診療を行います。また、訪問看護サービスや、グループホームの運営、当事者研究、気軽に立ち寄ることのできる居場所作り、パン作りなど、地域での安定した生活をしていくための様々な活動を展開して

います。

TENOHASIの全ての活動は、基本的にHFTPの活動の中核を担っているものです。

■TENOHASIのボランティアの視点から■

ところで、この数年内で、定期的にボランティアに参加するようになった私にとって、実はTENOHASIという団体とHFTPの関係、他の参加団体との関係がよく分からないものでした。しかしTENOHAS



Iのベテランの皆さん、他の団体の皆さんからお話を伺って自分なりの理解をし、今「TENOHASIにとってのHFTPとは、TENOHASIだけでは実現できなかった様々なことを可能にするために自分たちで作りましたプロジェクト」と捉えています。

皆さんご存知の通り、HFTPが存在する以前からTENOHASIは池袋でのホームレス状態の方への支援をしています。ヒト、モノ、カネの資源が限られた中で、実現したくてもできないことがありました。HFTPは、TENOHASIが実現したかったことを形にし始めています。

世界の医療団との連携や、SWOC (Social Workers' Office/Clinic) の立ち上げは、医師・看護師・ソーシャルワーカーの人的充実や組織的な体制の充実を目指すものです。KAZOOCやべてぶくろ、あさやけべーカリーとの連携は、地域生活への移行や日々の生活の安定を助ける支援の仕組みを作っています。つくろい東京ファンドからは、シェルターの提供を受けています。

■HFTPへの期待■

HFTPでは、理念と目的を共有する団体が、柔軟に連携、協力しあうことで、単独団体では難しいことを形にしています。HFTP内で新たな組織が産まれ、所属の軸足を移す人や、複数の団体に重複して所属する人もいます。また、活動の幅が広がるにつれ、それぞれの分野での役割分担も進みます。そのこと自体は問題ではありませんが、残念ながらHFTP全体像の分かりにくさや、それぞれの支援の実践領域での活動の方針の分かりにくさの要因ともなります。

TENOHASIに携わる全ての人にとってHFTPとは、自分たち自身の活動、つまり「何らかの障がいや自分では解決できない生き辛さを抱える人の安定した地域生活を支える」活動を発展させ、充実させるものであると実感できるように、HFTPについて、これまで以上の情報発信がされ、理解が進むことを期待します。

(三浦建太郎)

昭和女一代記 Iさんインタビュー

Iさんは、今年80になる気つぷのいいおばあちゃん。

「死に場所を求めて」やってきた池袋で、私たちの夜回りに出会ったのが1年前です。ワーカーが訪問に行くといつもお手製のもつ煮やレバナラを振る舞ってくれて、酒が出て、結局どんちゃん騒ぎになってしまおうという名物ばあちゃんです。聞いてみたら「粹な辰巳芸者」で有名な深川生まれ。納得しました。ずっと関わってきたワーカーの小川さんと共に、私も飲みながらインタビューしました。では、「昭和女一代記」をお読みください。



生まれはどこなんですか？

生まれは深川ね。そこを戦争で焼け出されて。あちこち転々として、親父の会社の社宅に落ち着いた。親父はあたしが赤ん坊の頃戦争に行ったけど帰ってきた。お母さんが親父にべた惚れで、出張行くとお母さんがついて行っちゃう。子どもほっぽらかして。バカか。それだけ仲間がよかつたんでしょ。

兄弟は九人。あの頃は産めよ増やせよだから。私は四番目。一番苦労したね。食べるものがない。腹減らした弟が金魚鉢をじーつと見て「姉ちゃん、この金魚食えるかな」「食えるわけないだろ」。ああこのままじゃダメだ、自分がうちにいなければご飯も食べなくていいし、住み込みで働こうと思って一念発起。中学卒業しないうちに奉公に行った。中学は卒業証書もらってない。それどころじゃなか

った。家族が大事。稼ぐのが先。

働いたのは築地の軽食屋。2、3年いたね。波除神社のあたり。あの頃給料が一ヶ月五百円だった。月末になると妹が来るんだ。

「姉ちゃん、これ買って」「しようがねえな」。給料全部渡したよ。その代わりチップをもらえて、給料より多かった。それはおかみさんが持つてて、お金使うときに出してもらおう。まあ、お金使う事もないし。銭湯だけ。昔はそんなもん。

月2回の休みも1回しか休まなかった。お菓子も売ってたから、休みの日にはアイスクリームもらったり、おでん屋さんに行けば山ほどおまけしてくれたり。皆さんにはよくしてもらってたね。

でも、男が夜這いにきたんだよ。部屋で寝てたらなんかゴソゴソするんだ。目を覚ましたら男が立ってるからびっくりしてさ、二階から飛び降りてそのまま音羽にあった親の家まで歩い

て帰った。

スケパンだったっていうのはその後ですか？

それからだよ、悪くなったのは。暴れたね。ケンカに負けたことがない。相手が鎖出したから「やってみる。そんなもん使えねえくせに、自分がケガするぞ」って、一番強い奴の頭をねじってひっくり返したよ。都立大塚公園だったから、となりの大塚病院の患者がワイワイ言いながら見てる。「見てないで、おまえら早く病気治して出てこい」って言ってやった。

親父？何も言わなかったよ。でも後になって、「ああ、学校行つてない奴は字がわかんなくて困るな。おまえ、一日一個でいいから字覚えろ、1年したら365個覚えるから」っていうんだよ。「バカヤロー、覚えたってそのあとこちゃこちゃやってるうち忘れちゃうよ、それど

ころじゃない。食う金稼がなきやなんないからそんなことやってられないよ」って言い返したら「しょうがねえな」。うちの親父、頭よくて字もうまかった。でも貧乏させてるから子どもにも勉強しろとか言えなかったね。

音羽では製本の仕事やってた。それから池袋のキャバレー。そしてら地元のヤクザが来て「おい、とし子じゃないか」。うちの近所に住んでたあんちゃんだったんだよ。知らなくて「あんちゃんあんちゃん」って言うってたんだけど、実はヤクザでも上の方だった。だから「アタシ、ここじゃとし子じゃないから」って言うってやった。あの頃はイケケだったね。

最初の旦那に会ったのはそのころだ。町田にうまい桜肉食わせるところがあるから行くって誘われて、友達と食いに行つた。みんな呑兵衛だからそのあと飲みに行つて、そこで出会ったのが最初の旦那。横浜の造船所に勤めてるって言うから、ちゃんとした仕事してるって思ってたわけ。こいつは大丈夫かなと思つて同棲したんだ。けどどんなか働いている感じがしないんだね。よくよく聞いたら、造船所

なんかすぐ辞めてて、親から金もらつてるだけ。お父さんは農林省とか務めてて、兄は医者、弟は弁護士。真ん中だけぼんぼんのバカ。産まれた子どもを引き取つて別れようとしたら、「跡継ぎだからおいてけ」って言われた。でもその子を自分の姉さんに任せつきりで自分は遊び歩いてたから、姉さんのとこにいて「悪いけどこのまま連れて帰るから」。姉さんは手を合せてありがたがってた。234のころ。

親父たちはそのころ練馬の富士見台にいた。おふくろがおでんの屋台をやつてたから、あたしが赤ん坊おぶつて早いうち屋台やつて、おふくろが来たたら交代して。あれから富士見台の駅はものすごい変わつちやつたね。昔は小汚いちっちゃな駅だったよ。

それでもまだうちは貧乏だから、「お母ちゃん、このままじゃうちもつぶれそうだから稼ぎに行くよ、子どもの面倒見てくれ」って言ったんだ。そしたらおふくろ「五万円くんなきや子ども見らんない」って言うんだよ、わかるだろ、昔っから出してるから言えば出すって思つて

るんだ、あのババア。「いいよ、五万円ね、わかった。その代わりちゃんとみて」って金置いて働きに出た。その子はそのあと、妹のところにも子どもがでなかつたので養子に出された。ところが妹に子どもが生まれた。そんなもんだよ。かわいそうだから中学に上がったときに引き取つた。その時妹がいくら金取つたと思う？30万だよ。50年前の30万。凶凶しいから金取るんだ。それも「お姉ちゃん貸してくだされ」だ。返す気なんかないね。

働きの行ったのは湯河原。旅館で芸者になつた。踊り好きだったから。でも1年もやんなかつたな。あたしや色気で売るより、掃除とか下働きのほうが好き。そこで、旅館の運転手してた次の旦那と出会つたんだよ。

そいで二人で働いてただけで、旦那が急に「トラック買って魚を運ぶ仕事したい」って言い出すんだ。あたしや「頼むよ、まだ金もないのに。もうちよつとしつかり貯めてから買おうよ。段取りつてものがあるんだよ」って言つたんだけど、バカだから思いついたらすぐやりたくなつて聞かない。しょうがないか

ら月賦でトラック買った。伊東で魚を運ぶ仕事するって言うから、トラックに荷物積んで、まだ部屋も借りてないのに伊東に行つたんだ。出たとこ勝負。それで不動産屋に行つて「いい部屋ない？」って。元旅館の八畳の部屋に落ち着いた。

そしたらこんどは旦那が「石を運ぶ仕事みつけてきた。こっちの方が儲かる」と。あたしや「バカヤロー、石なんかやつたらトラックがボコボコになるじゃないか」っていったけど、他に仕事ないって言うから、まあいいや、言い出したら聞かぬえし、失敗したら失敗したでいいやと。結局トラックはボコボコになつたから売つちやつて、旦那は魚を運ぶ仕事に戻つた。

そのあと、子どもが二人生まれた。女の子と男の子。私は別荘の掃除やラーメン屋とか仕事をかけもちして働いた。他にもいろいろあつたけど忘れたね。

小川：女盛りの頃ですからね。言えないことがいろいろあるんじゃないですか。

そのうち思い出すかな（笑）。

旦那とは72のときに別れた。きっかけ？言葉の暴力って言うのかな。それにずっと耐えて耐えて耐えてきた。「俺の給料で、オレの年金でお前は暮らしてるくせに」とか。「ふざけんな、私はずっと働いてるんだ。自分はちっとも金を家に入れないくせに何をバカなことを言ってるんだ」って思ったよ。納得いかない。もう我慢できない。

役所に相談に行ったけど、若いガキが偉そうに説教垂れるだけ。全然わかってくれない。だから最後の一言。「言葉の暴力って知ってますか」「え、なんですかそれ」「ああ、わかんなきゃいい。ごめんね。失礼しました」って帰っちゃった。情けなかった。ああやだと。区切り付けて東京に出てきた。

最初は妹や弟の所に行った。若い頃私が食べさせてた子たち。でも、妹や弟がこれ買って欲しいとか、病人の世話してくれとか、子どもが小遣いくれとか。弟は生活保護だったから、私の年金からいろいろ出してやってた。でも、向こうは金出してもらってあたりまえ。やってもらってもらって当たり前。やってもらわないと思った。

最後に娘の所に行ったけど、居留守使って30分くらい出てこない。やっと出てきたら「お母さん年金で暮らせるならアパート借りたらいいじゃない」と。もうわかった、おまえが何を考えているかわかってた。電車賃五千円だけもらって30分くらいで帰ってきた。

もう死んじやおうと思って池袋にきた。それが去年の6月頃。金があるうちはホテル泊まって、なくなったら北口の地下道(ウイロード)に座ってた。二週間くらい。

おまわりさんが来て、ここで寝てちや困るから移動してくださいと。「はいわかりました」って言ったけど、でも雨降ってきたから、まあいいや、この前音楽の人もおまわりさんが居なくなったらまた戻ってきたし。これで最後だと思えば関係ないや。その時は死ぬ気だったから。首つりはみつともないからよ、包丁でクビ刺せば一発でいけるなど。

そしたら通りがかった中国人の女の人が心配して、お金を五千円もくれたり、コインランドリーにつれてったり洗濯してく



れたりしたんだ。「うちに泊って下さい」まで言ってくれた。悪いと思っていかなかったけど、行けば良かったね。その人は旅行の添乗員だと言ってた。「おかあさん、私はこれから仕事で一週間居なくなるけど、大丈夫？」って。「ああ、大丈夫だよ」って言ったけど、大丈夫じゃなかった。

その夜だよ。金がなくて困っている若い人が居たからかわいそうだと思って日高屋でご飯食べさせたんだよ。そしたら、関

係ないヤツがそれを聞きつけて絡んできた。「俺にも金よこせ」って。それが水曜の夜だったんだね。そいつは大きな荷物持ってたから、逃げてまいてやったんだ。

そこを夜回りしてた中村あずささんが見て、ついてきたんだよ。

「こいつもなんだかわからないから、まいてやろう」と思ったけど、しつこくついてきたんだ。おにぎり出して「これ、食べて」って。パンもくれて。あとは何も言わない。音無しの構え。あれはすごい……。それで、その晩はホテルに泊めてくれた。

あのととき助けてもらってなかったら死んでたよ。いま、生きてない。酒も飲めない(笑)。それからシェルターに移ってしばらくいた。いろんな人が来るでしょ、だからレバニラとか煮込みとか肉じゃが作って食べてもらった。みんな喜んでね。それも縁なものね。

小川「酒飲んだらあのおばちゃん元気になるから、行け行け」ってみんな喜んで訪問したんですよ。で、金曜の晩は酒盛り(笑)。

でもね、今だから笑って話せるけど、その時は「あらやだ、どうしよう、こんないいとこ入れてもらって。どうすんのかしら。いつまでいられんのかしら」って心配だったんだ。

そしたら、「アパート借りましょう」って言ってきてくれた。

小川：なかなか見つからなかったんです。でも、探していくなかでも継母に育てられたからそういうのが分かる。ぜひお手伝いしたい」って言うてくれて、ここを紹介してくれたんです。最初、大家さんは「ここは他より広いから家賃は六万」って言うてたんですが、その不動産屋さんが「見た目ほど広くないですよね」「測っていいですか」「他とそんなに変わりませんか」「よってやってくれたから、私もすかさず「じゃあ、家賃も他の部屋と一緒にいいですよね」。安く借りることができたんです。

でもね、年金だけじゃ生活できないから、今、役所で（生活保護費を）4万くらいもらっているんだ。申し訳ないと思うけどしょうがない。

小川：Iさんは最初、生活保護を受けるのに抵抗があったんですよ。腕一本で稼いできた人ですからね。「それなら死んじやった方がいい」とか言い出して。ほんとに自殺するんじゃないかって心配して、それでみんなが足繁く通ってたつてもありません。

それがどうして受ける気になったんですか？

小川ちゃんとかあずささんが一生懸命やってくれるんで。あんたらが言うてるなら乗ってみるかなと。そんな悪いことにはならないだろうと。

こいつらをちょっと喜ばしてやるうかと思っただんですね（笑）。

それで今のこういう生活ができてくるってこと。感謝してますよ。感謝しかない。

うちはみんないるんな人が来るでしょ、訪問看護の人も。そしたら「休んでいきな、食べていきな」って。暑いのに大変だから、15分でも20分でもサボってきな。タバコ吸って

きなって言うんだ。

小川：訪問看護はタバコ吸えませんからね。

みんなにお金使わせちゃって悪いと思ってるよ、ババアは。だから金貯めるよ。「死ぬまでに50万円貯めろ」って一平ちゃん（懇意にしている訪問看護の看護師）に言われてるんだ。

50万円で葬式しろって？

ちがうよ。ババアが死んだらみんなが宴会できるようにって。「そしたらババアも一回起き上がったって、飲んでからまた死ねばいい」って言うんだよ、一平ちゃん（笑）。

あんたら人のためにばっかりやっててちっとも自分のためにやってないじゃない。

小川：今うちの子どももの誕生日にいろいろやってもらったりしてるんですよ。それで子どもがお礼の手紙書いたりして。

でも、人生っていいことないのが普通だけど、そんなことないね。ババアは小川ちゃんとかあずさちゃんとか皆さんに拾われて、幸せだね。

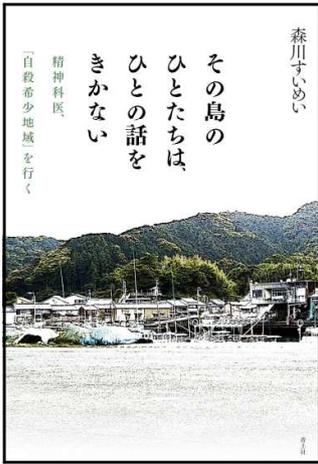
あと、あの中国の人には死ぬ前に会いたい。あの人が居なかったらとつくに死んでた。私は人のずるいところばかり見てきたけど、あの人が私を救ってくれた。今でも地下道に行ってみるけど、見つからない。あの人だけは絶対探したい……

宴会は夜が更けるまで続いた……



by GEOFF READ

TENOHASI理事 森川すいめいの 新刊がでました。



(青土社／税抜き1400円)

「今、即、助ける」「できることは助ける。できないことは相談する」数々の支援活動で注目をあびる精神科医が、生きやすさのヒントを探す旅に出る。
(「BOOK」データベースより)

徳島県の旧海部町では、家の鍵をかけずに数日間外出すると、腐った魚まみれになるといふ。そこかしこの家の鍵があいているこの地域では、釣った魚が勝手におすそ分けされる。「もらう側の意向は関係ない」ので、「あげたいと思つたひとがあげたいひとに魚を届ける」のだ。

精神科医が全国各地の「自殺で亡くなるひとが少ない地域」自殺希少地域」を巡った本書は、いくつものきっかけを教えてください。それらは壮大な取り組みではなく、些細なことばかり。

たとえばベンチ。都心ではお得意の「防犯上」との理由でベンチが除去されていくが、ベンチを置きさえすれば、そこにコミュニケーションが発生する。誰かが座り、会話が育まれる。喫茶店に入らなければ座ることさえできない都心では、建築が会話を剥ぎ取る。安心安全という名目の排他が、街の呼吸を止めてしまうのだ。

訪ねた地域の人々が、とつても自分勝手なのが清々しい。青森県の旧平館村で、著者は「自分が助けたと思うから助ける」という根つこの感覚に気付く。人のため、と身構えると、その濃淡が問われがちだが、「自分がどうしたいか」を問えば、人はやがて助けられることに慣れてくる。特別なことだと聞かされるから、人は誰かに助けられることに恐縮してしまう。

神津島で出会った若者から、本書のタイトルに繋がった言葉「この島のひとたちは、ひとの話をきかない」を拾い上げる。相手と同調することを決して良しとしない。他人は他人。「なるようにしかならないから」との放念が、正解ばかりを追う世の中の緊張感をほぐしてくれる。

処方箋が示されているわけではない。しかし、そもそも私たちは、すぐに処方箋を求めてしまうことから見直すべきなのだ。

武田砂鉄(たけだ・さてつ)
(サンデー毎日年8月7日号)

からだとのい
こきやうとのい
こころとのい
対話を
28.8.28
森川すいめい

森川すいめい 青土社
その島のひとたちは、ひとの話をきかない
精神科医
「自殺希少地域」に行く

はっぴいめーかー大募集

□TENOHASIの活動

- 炊き出し 毎月第2/第4土曜日 東池袋中央公園
- | | |
|---------------------|-------------|
| 鍼灸・マッサージ | 16:00～18:00 |
| 衣類配布 | 16:30～17:00 |
| 医療相談 生活相談 | 17:00～18:00 |
| ほっと友の会（お茶会・第4土曜日のみ） | 17:00～18:00 |
| 配食 | 18:00～18:30 |
- おにぎりと夜回り 毎週水曜日
- | | | |
|---------------|--------|--------|
| おにぎり配布と医療生活相談 | 21:30～ | 池袋駅前公園 |
| 夜回りと医療生活相談 | 21:45～ | 池袋駅と周辺 |
- ハウジングファースト東京プロジェクト 路上脱出と安定した地域生活への移行支援
参加団体：TENOHASI・世界の医療団・べてぶくろ
訪問看護センターkazoc・あさやけベーカリー
東京つくろいファンド・SWOC/ゆうりんクリニック

□ 活動資金のカンパをおねがいします！！

郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人TENOHASI
振込 ゆうちょ銀行 019(せうけい)支店 当座 259686 トクヒ) テノハシ

□ 物資カンパも大募集中！！

衣類（これからは秋冬物。スーツ・女性もの不要）・靴・毛布・カミソリなど
食材（米・缶詰・レトルト食品など。）

【送り先】〒177-0045 練馬区石神井台6-1-28清野方 TENOHASI TEL090-1611-1970)

寄付・ボランティアのお問い合わせ
メール：TENOHASIのホームページの「お問い合わせ」から
電話：090-1611-1970(事務局長 清野賢司 平日は18時以降)

特定非営利活動法人TENOHASI

会報第34号

2016/8/30発行

□ ホームページ <http://tenohasi.org/>

□ メール tenohasi@yahoo.co.jp

印刷 アビーム(社会福祉法人復生あせび会)

発送元

〒177-0045

練馬区石神井台6-1-28 清野方

TENOHASI

TEL 090-1611-1970

(事務局長 清野賢司)